

近江を心の拠り所として生きる 戦国史のヒロイン「お江」を描く。

湖 INTERVIEW

脚本家

田渕久美子さん

大ヒットしたNHK大河ドラマ『篤姫』に続き、
2011年の『江(ごう)～姫たちの戦国～』に
挑戦するのは人気脚本家の田渕久美子さん。
近江を舞台にどんなヒロインが誕生するのか…。
執筆中の田渕さんに熱く語っていただきました。



田渕さんが著した2011年のNHK大河ドラマ
「江～姫たちの戦国～」の原脚本(上・下巻)。





長浜市浅井支所前交差点にある浅井一家の像。

小谷山を指差すお市、長政と子どもたち。

高田 ●2011年のNHK大河ドラマに『江〜姫たちの戦国〜』が決まり、一昨年『篤姫』でブームを巻き起こした脚本家の田淵久美子さんが再び筆を執られます。さっそく原作を読ませていただきましたが、シナリオは順調に進んでおられるのですか。

田淵 ●現在執筆中で、最終的には全47話になります。来年7月ぐらいまでに書き上げる予定です。

高田 ●それはすごいですね。例えば大きな絵を描くときはデッサンをしたい固めるじゃないですか。シナリオも47話の割り振りを大まかに決められた上で取りかかれるんですか。

田淵 ●なんとなく大筋を固めておいて、それから書きはじめます。場面設定から一人ひとりのセリフまですべてです。

高田 ●書き上げたときの達成感は何ものにもかえられないものなんでしょうね。『篤姫』は回を重ねるに従って盛り上がってきて、反響も大きかったですね。最初から歴史ものはお好きだったんですか。

田淵 ●いえ、歴史ものは『篤姫』がは

じめてです。これまではサスペンス、恋愛、ヒューマンドラマなど、さまざまジャンルを書いていました。

高田 ●最初からシナリオ作家を目指されていたんですか。

田淵 ●いろいろな職業に就きました。地元の銀行に勤めたこともありましたが、でも、どうもこの仕事が私に向いているんじゃないかなという予感があったので、それでシナリオ学校に半年ほど通いました。卒業時に書いた作品が認められ、26歳でデビュー。それからずっとこの仕事です。

高田 ●大河ドラマの第1作が『花の生涯』で、今回の『江』は記念すべき50作目、くしくも同じ滋賀が舞台ですよ。『江』にトライされるきっかけは、田淵さん自身のお考えだったんですか。

田淵 ●NHKさんから、お市の方の娘、浅井三姉妹の「お江」でどうかという依頼がありました。なぜ末っ子のお江なのか。名前が知られているという意味では、お姉さんの茶々(淀)だと考えたんですけれども、でも、知れば知るほどお江さんは大した人だなあと感じていきます。後に徳川第二代將軍となる秀忠の正室となり、また、三代將軍・家光を生み、さらには娘を天皇家にも嫁がせ、加賀百万石で知られる前田家にも嫁がせている。DNAをこ

じますしね。

高田 ●原作を読ませていただいて、私が好きだったのは信長のメッセージです。「そのまま大きゅうなれ、お江。おのれを信じ、おのれの思うまま存分に生きよ」。信長のこの言葉をお江がいつも思い出して、苦境に立ったときも自らを奮い起こし、次のステップへ、新世界を求めていく。このお江のスピリットが素晴らしい。

田淵 ●うれしいです。私の描く主人公には共通点があつて、女性本来の直感力というものがいきいきと働いている、そんな女性にしたいと思っています。お江も、信長の言葉の通り、「おのれの直感を信じて、おのれの思うままに生きていく」女性として描いていきたいですね。

高田 ●彼女の人生はまさに苦難の連続だと思う。しかし、常に悩んだときに背中を押したのが、あの信長だったんじゃないでしょうか。

田淵 ●おっしゃる通りです。お江は信長を伯父にもち、秀吉を義理の兄、家康を義理の父にもちましたが、個人的な思いでは信長の影響をい

ちばん受けたのではないかと考えますね。実は私自身も信長が好きで、信長の場面を書いてみるとゾクゾクしてくるんです。

(笑)。信長は色気のある、いい男だったんじゃないでしょうか。



滋賀銀行取締役会長 高田 紘一

信長の言葉を胸に秘め、苦難を乗り越えるヒロイン・お江のスピリットが素晴らしい。



脚本家 田淵久美子さん(たぶち・くみこ)

自分の直感を信じて思うままに生きた女性。お江は戦国時代の勝者ではないでしょうか。



大津港を望む琵琶湖ホテルにて(2010年3月取材)。

高田 ● お江が信長に似ているという設定は田渕さんの創造ですか。

田渕 ● そうです。お市の最期の言葉として出てきますが、浅井の血を継いでいるのが茶々で、織田の血を継いでいるのはお江。次女の初は姉妹のあいだを結びつける役割ですね。

高田 ● 絶妙ですね。それから田渕さんが「脚本家の言葉」として書かれた一節が好きなんです。「女たちはただひとえに争いのない日々を思い、恒久的な泰平を願っていたのではないだろ

“覚悟”をもって生きたい という私の思いは お江にも重ねていきたい。

うか」。田渕さんはとくに、

平和を希求する女性からの強いメッセージをお江に込められたんじゃないかなと思う。戦国時代の女性たちの話だから、現代の女性たちに伝えるのは難しいのかもしれませんが。

田渕 ● 歴史ものを書くときに注意していることでもあるのですが、当時の女性は政略結婚も含めて男性の言うがまま、言いなりになって、さまざま

まなことを成さなければならなかったと思うんです。でも現代の女性たちにそのままを伝えたくて、なかなか受け入れられない。理解できないと思います。現代の女性にもわかる言葉に翻訳して、人物の気持ちを重ねていく。共感を得ていただけような、ちょっとした工夫を随所にしていないといけません。

高田 ● 田渕さん自身の生き方や考え、ポリシーなども登場人物に反映されているのですか。

田渕 ● どうしてもそうなりますね。書く人間と似ちゃうんです(笑)。それは『篤姫』のときも同じ。“覚悟”をもつて生きたいという私の思いはお江にも重ねたいと思います。

高田 ● ドラマではいろいろなシーンがあると思いますが、滋賀県の名所旧跡、自然など、ぜひロケをお願いしたい。田渕さんが実際にご覧になって、滋賀の印象はいかがですか。

田渕 ● 今回改めて勉強してみて、小

谷城跡、賤ヶ岳も実際に行きました

が、この場所であのような戦があり、さまざまドラマがあったんだと、そのことがもう驚きでした。戦国時代とこれまでひとくりに考えてきましたが、まさにここがその舞台だったんだと……もっと知りたいですね、近江のことを。

高田 ● 実際にご覧になっていない場所でも、自分の心に咀嚼し直して、イメージをふくらませておられる言葉が小説にはいっぱい出てきますよね。ひとつは風であり、湖の匂い。それが幼いお江の心象風景として描かれ、それがどんどん展開していく。だから琵琶湖がないと、このストーリーは完成しない。

田渕 ● 私は島根県の生まれで、宍道湖という湖があるのですが、琵琶湖は他の湖とは違うとんでもないスケール感があつて、それに地形が色づいているですね。女性のウエストみたいにきゅんとくびれていて。

高田 ● 琵琶湖には女性のようなやさしさがあり、私たちは「母なる琵琶湖」と言っています。いまは地球環境問題も大事なテーマです。琵琶湖は過去から引き継いだものではあるけれども、大事なのは我々の子どもや孫の時代に、きれいにして未来に引き継ぐことだと思っんです。

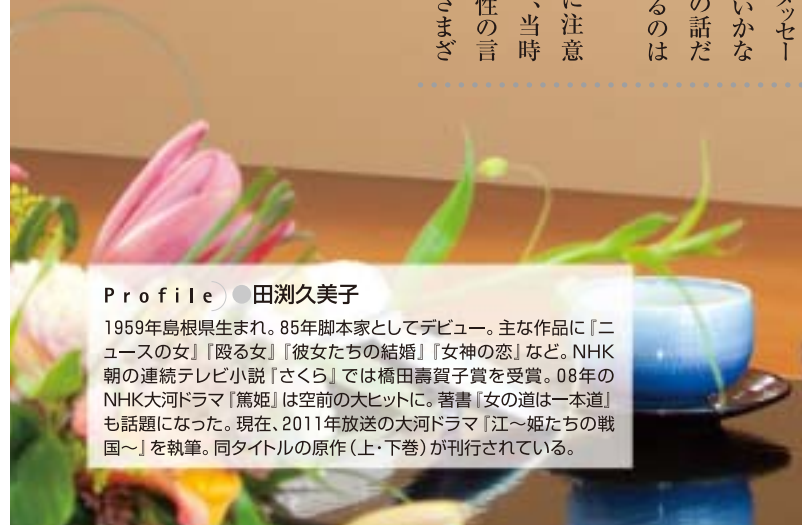
田渕 ● すばらしいお考えですね。

高田 ● 滋賀銀行も早くから「グリーンバンクしがぎん」をスローガンに掲げ

て、環境問題に取り組んでいます。銀行業務を通じて環境を大切に、そういうカルチャーをこの滋賀県に育てたいというのが私の夢です。ところで、これからやってみていお仕事、描きたいテーマはありますか。

田渕 ● 大河の執筆の真つ最中なので(笑)、まだこれからです。ただ、同時進行で映画のシナリオを書いています。頭を切り替えて、さあ今日はどちらから始めようかなと(笑)。
高田 ● NHKの名ディレクター故・吉田直哉さんは、大河ドラマの魅力は「過去と現在との対話」であると。単に歴史的に昔こんなことがあつたというだけでなく、それを筆者が描いた映像の活力で我々が感じ取る。感性が探られているわけですね。まさに過去と現在の対話にしてください。田渕さんのロマンに私たちは共感して、オール滋賀をあげて『江』を盛り上げていきたいと思つています。来年の放送を本当に楽しみにしております。本日はありがとうございました。

琵琶湖の雄大なスケール感が、お江のドラマには欠かせない。(写真提供/びわこビジターズビューロー)



Profile ● 田渕久美子

1959年島根県生まれ。85年脚本家としてデビュー。主な作品に『ニュースの女』『殴る女』『彼女たちの結婚』『女神の恋』など。NHK朝の連続テレビ小説『さくら』では橋田壽賀子賞を受賞。08年のNHK大河ドラマ『篤姫』は空前の大ヒットに。著書『女の道は一本道』も話題になった。現在、2011年放送の大河ドラマ『江～姫たちの戦国～』を執筆。同タイトルの原作(上・下巻)が刊行されている。